
生徒の社会的自立を目指した寄宿舎生活指導の取り組み
—自立活動の視点に基づく「生活の記録」の見直し、学部・保護者との連携—

沖縄県立沖縄高等特別支援学校
寄宿舎指導員 比嘉良征 嘉数亮 豊里さより

1. 題設定の理由

本校は、知的障がいの比較的軽度の生徒を対象にした県内唯一の全寮制の特別支援学校である。全校生徒127名（男子86名、女子41名）の、高等部単独校であり、寄宿舎の運営に当たっては、全職員の共通理解の下に基本的な生活習慣の確立及び社会自立を目標として個々の能力と特性に応じた指導を進めている。同時に、より良き生活環境を整え、楽しい集団生活が送れるように配慮し、学部、家庭との連携を密にして社会的自立のできる人間育成を行っている。

その中で、生徒の実態や課題、支援方法を寄宿舎職員で共有でき、統一した支援ができるツールとして「生活の記録」を作成しており、生徒の社会的自立に必要な力の育成に活かしている。一方で、寄宿舎職員の勤務体制と学部の職員では勤務時間が合わないこともあり、情報共有をする十分な時間の確保が難しいのが現状である。「生活の記録」は、そういった状況でも情報共有のツールとして、活用されるべきものであるが、寄宿舎主体で作成された様式では、評価項目が整理されていなかったり、評価の基準が曖昧であったりと、学部職員が活用するには、改善するべき点がみられた。評価基準に関しては、基準が曖昧なため、担当職員の主観的評価となってしまう、生徒の個別課題に対する支援に、職員間で差が生じているように感じることもある。

また、保護者への成果報告や課題の確認などにも「生活の記録」を用いているが、「子ども達の様子を文章でたくさん書いてくれているが、家庭では何をすればよいのかがわからない。」「項目が多くて、家庭で何を優先に指導すればよいのかわからない。」などの意見が挙がり、成果や課題について十分な共有ができていないことが伺えた。

このような課題が挙げられることから、寄宿舎、学部、家庭の三者が「生活の記録」を介して共通認識ができ、途切れのない指導支援をしていくためにも、評価基準を明確にし、よりわかりやすく明記されたもの

に改善していく必要性を強く感じ、本テーマを設定した。

2. 研究の仮説

寄宿舎指導員が行う生活指導は、「自立活動」として捉えることができる。それを踏まえて「生活の記録」を見直し改善することで、生徒の実態や課題について学部と共通認識ができ、勤務時間の制約がある中でも支援体制などの連携強化につながるツールとなるであろう。また、評価基準を明確に示すことで、担当職員の主観的評価にならず、寄宿舎職員全員および学部と家庭との連携や統一した指導支援の継続にもつながり、生徒一人ひとりの生活力の向上に結びつくであろう。

3. 研究の内容

(1) 「自立活動」としての捉え

本校の寄宿舎における生活指導は、規則正しい起床・就寝、食事、入浴、体調管理など基本的な生活習慣の形成に関することや、異年齢集団での生活の中で、よりよい人間関係の形成・コミュニケーションに関する指導を行っている。また、授業でうまくいかないことや、友だちとトラブルがある時などに、気持ちをうまく切り替えられない生徒や、情緒が不安定になりやすい生徒もいるため、情緒の安定を図る指導も行っている。これらは寄宿舎指導員が日頃行っている生活指導であるが、自立活動に示されている「健康の保持」、「人間関係の形成」、「コミュニケーション」、「心理的な安定」と重なる部分が多い。自立活動は学校の教育活動全体を通じて適切に行うものであるため、寄宿舎での生活指導は自立活動として捉えることができると考えられる。以上のことを踏まえて、以前から、生徒の実態や課題、支援方法を共有していたツール「生活の記録」に、自立活動の視点を取り入れることで、生徒の実態や課題について学部と共通認識ができ、勤務時間の制約がある中でも支援体制などの連携強化につながると思い、「生活の記録」の見直し改善を試みた。

(2) 様式の見直し

令和2年度の2学期から、新様式の作成に取り組んだ。以前までの旧様式(表1)ではA(自立している)、B(言葉かけでできる)C(職員と一緒に取り組むとできる)、といった3段階評価と、成果及び課題を文章で評価する形だった。旧様式だと評価がCの生徒でも、良い点を文章で入力することができるメリットがあったが、全ての項目に対して文章入力していたため、一目見ただけでは生徒の課題が読み取りにくかった。また、一つの項目に対して細かい評価基準が設けられておらず、基準が曖昧なため、担当職員の主観的評価となっていた。

表1 旧様式

項目	内容	前期	後期	生活の様子	支援方法/成果と課題(前期)
B 対人関係	①部屋会	B	A	・先輩に教わりながら日直活動ができています。 ・日直活動も自ら進んで取り組むことができた。	(支援方法) ・協力して日直、係活動等ができるよう言葉かけや見守りをした。 (成果と課題) ・日直活動も自ら進んで取り組むことができた。
	②日直	B	A		
	③係活動等	B	A		
対人関係 コミュニケーション (日常生活)	①あいさつ・返事	B	B	・職員に対して時々フレンドリーな言葉遣いになることがある。 ・職員からあいさつすることが多いので、自ら進んであいさつできるようになる良い。 ・相手の気持ちを考えずに行動することがあったが、職員と一緒に自分の行動を振り返り、改善することができた。	(支援方法) ・丁寧な言葉遣いを意識できるよう適宜言葉かけをした。 (成果と課題) ・職員からあいさつすることが多いので、自ら進んであいさつできるようになる良い。 ・相手の気持ちを考えずに行動することがあったが、職員と一緒に自分の行動を振り返り、改善することができた。
	②言葉遣い	B	B		
	③友達との関わり	A	B		
	④集団参加	B	A		
	⑤聞く態度	B	A		

自立活動の視点を取り入れた新様式(表2-1)では、寄宿舎における生活指導として取り組んでいる内容と、自立活動の6区分と重なる部分が多かった「健康の保持」、「心理的な安定」、「人間関係の形成」、「コミュニケーション」を評価項目の柱とし、新たに設定した。

表2-1 新様式 評価項目の柱

評価項目	評価基準	前期評価	特記事項
人間関係の形成・コミュニケーション	A 「生活の記録」の左端に自立活動の区分である「健康の保持」、「心理的な安定」、「人間関係の形成」、「コミュニケーション」を評価項目の柱とした。	C	
	B	C	
	C	C	
	D	C	・異性と距離感が近かったり、相手の気持ちを考えずに行動することがあり、友人とギクシャクすることがあった。
	E	C	
対人関係	A	C	
	B	C	
	C	C	
	D	C	
	E	C	
集団参加	A	B	
	B	B	
	C	B	
	D	B	
	E	B	

また、評価基準を5段階評価(A・B・C・D・E)とし、より詳細に示すことで個々の成果や課題を一目で見えやすくなるよう工夫した。さらに、特記事項の欄を設け、評価がD又はEとなった項目は必ず支援方法等を入力する、評価がC以上でも成果や課題など入力したいことがあれば入力できる形にした。(表2-2)

表2-2 新様式 評価基準の明確化

評価項目	評価基準	前期評価	特記事項
人間関係の形成・コミュニケーション	A 自分から大きな声でしっかりできる	C	
	B 声が小さい等十分ではないが自分からできる		
	C 自分からではないが言葉かけすれば反応できる		
	D 言葉かけすると何とか応答できた		
	E 何を言われても黙っていた		
対人関係	A 丁寧な言葉遣いができる	B	
	B 少々気になる点があるが、問題ない程度である		
	C 時々、言葉遣いの使い分けができないことがあるが、職員の言葉かけで改善できる		
	D 言葉かけされると、何とか改善できる		
	E 言葉かけされても、改善することが難しい		
集団参加	A 積極的に誰とでも良い関わりを持つことができる	B	
	B 他の人からの言葉かけに応答し良い関わりを持つことができる		
	C 他の人と関わらず単独で過ごすことが多いが、職員が言葉かけすると関わりができる		
	D 職員が間に入れば、何とか関わる事ができる		
	E 情緒が安定せず、他の人と関わるのが困難である		

評価基準をA~Eの5段階評価とし、以前より詳細に示した。

(3) 新様式を活用しての実践

①Aさん(3年生・男子)

○実態:素直で明るい性格。同世代よりは職員と過ごすことが多い。

○課題:悪気はないが、相手の気持ちを考えきれず思ったことを率直に伝えてしまうので、トラブルに発展してしまうことが多い。

表3 Aさん(3年生・男子)の旧様式評価

項目	内容	後期	生活の様子	支援方法/成果と課題(後期)
B 対人関係 コミュニケーション (日常生活)	①あいさつ・返事	B	・相手の気持ちを考えずに、思った事を口にしてしまい、友人とトラブルになることがある。	(支援方法) ・友人との関わりで、職員と一緒に相手の気持ちを考えていけるようにする。 (成果と課題) ・相手に気持ちを伝える前に職員に確認し、友人と良好な関係が築けつつある。
	②言葉遣い	C		
	③友達との関わり	C		
	④集団参加	C		
	⑤聞く態度	B		

旧様式での評価(表3)では「①あいさつ・返事」「⑤聞く態度」よりも、相方向にやりとりのある「②言葉遣い」「③友達との関わり」「④集団参加」のコミュニケーションスキルに課題があるのがわかる。しかし評価基準が曖昧なため、その支援方法も振り返りの対話のみなど漠然としたものになっており、支援ツールとしては不十分であった。

表4 Aさん(3年生・男子)の新様式評価

評価項目	評価基準	前期評価	特記事項
コミュニケーション関係の形成	A 積極的に誰とも良い関わりを持つことができる	C	職員に確認しなくても、相手の気持ちを考えて行動することが増えてきた。
	B 他の人からの言葉かけに応答し良い関わりを持つことができる		
	C 他の人と関わらず単独で過ごすことが多いが、職員が言葉かけすると関わるができる		
	D 職員が間に入れば、何とか関わるができる。又は時々トラブルがある		
	E 情緒が安定せず、他の人と関わるのが困難である		

新様式の評価(表4)では、Aさんのコミュニケーションスキルでの課題が具体的に評価されるようになった。この評価を受け、Aさんには職員との関わりからコミュニケーションスキルを獲得してもらおうと、様々な場面や受け応えの方法トラブルの例を伝えることとし、その機会を増やしていった。又、同時にAさん自身でも考える時間を設け、徐々に支援の介入度を減らすなど、支援の在り方も改善することができた。

② Bさん(3年生・男子)

○実態：見通しをもって行動できる。様々な事柄への理解が早い。また、スポーツが得意で体を動かすことを好む。

○課題：気分のムラによって不適切な行動と発言がある。

表5 Bさん(3年生・男子)の旧様式評価

項目	内容	後期	生活の様子	支援方法/成果と課題(後期)
B 対人関係 コミュニケーション(日常生活)	①あいさつ・返事	B	不機嫌な時に、良くない言葉遣いをする。友達との関わり、集団参加等においてトラブルになることが時々ある。	(支援方法) ・相手の気持ちを考えて、言葉遣い、関わり方、集団参加ができるようにその都度言葉かけを行った。 (成果と課題) ・情緒が安定している時は、他人に優しく接することができるが、情緒が不安定な時は自分勝手な行動が多い。
	②言葉遣い	C		
	③友達との関わり	C		
	④集団参加	C		
	⑤聞く態度	B		

旧様式(表5)での評価でBさんはAさん同様、コミュニケーション力に支援を要することが確認できたが、コミュニケーションの様々な内容で課題があり、どの様な時に支援を必要とするのかがわかりにくく、担任をはじめ学部との統一した支援を行うことが難しかった。

表6 Bさん(3年生・男子)新様式評価①

評価項目	評価基準	前期評価	特記事項
心理的な安定 情緒のコントロール	A 自ら情緒の安定を図ることができる	C	不安定な時は、職員に相談することが徐々にできるようになっている。自分勝手な行動をせず、常に相談出来るよう、継続して言葉かけしていく。
	B 時々不安定になることがあるが、職員に相談して改善することができる		
	C 時々職員に言葉かけられることがあるが、すぐ改善できる		
	D 言葉かけをしたり、職員と一緒に取り組むと改善できる		
	E 職員と一緒に取り組んでも改善することが難しい		

新様式(表6)で評価した時、自立活動の「心理的な安定」を柱にしていることから、「情緒のコントロール」を図る支援を最優先に学部と共有して計画することができた。

表7 Bさん(3年生・男子)新様式評価②

評価項目	評価基準	前期評価	特記事項
コミュニケーション関係の形成	A 積極的に誰とも良い関わりを持つことができる	C	落ち着いて過ごす日が増え、友人とのトラブルも減りつつある。
	B 他の人からの言葉かけに応答し良い関わりを持つことができる		
	C 他の人と関わらず単独で過ごすことが多いが、職員が言葉かけすると関わるができる		
	D 職員が間に入れば、何とか関わるができる。又は時々トラブルがある。		
	E 情緒が安定せず、他の人と関わるのが困難である。		

また、男子Bさんに対して、「情緒のコントロール」を図る支援を、学校や寄宿舎でも優先的に行ったことで、「対人関係」においても良好な変化が見られた。(表7)

以上の2例から、新様式を自立活動の視点で捉え見直したことについて、寄宿舎の生活指導も「心理的な安定」「人間関係の形成」等の区分に示されている項目の中から必要な項目を選定し、それらを相互に関連づけて具体的な支援内容を設定することが大切であることが考察でき、学部と連携した適切な指導支援につなげることができたと感じる。

紹介した2名の生徒以外にも4月から7月という短い期間に成長することができた生徒が多く見られた。職員間の情報共有する時間が少ない中、「生活の記録」の様式を変更することで、学部、寄宿舎間での連携が以前に比べてうまく行うことができ、本当に必要な課

題に的を絞り、細かい指導を行えたと考える。

(4) 学部との連携

本研究では、生徒一人ひとりの成長と変容を促すために、学部との連携の強化も図った。令和2年度末時点での新2、3年生の評価を、新様式「生活の記録」の前期に入力し新部屋担当、新担任（令和3年度）への引き継ぎ資料とした。令和3年度4月末には、新1年生の現時点での評価を新様式に入力し、生徒の実態把握の参考資料とした。また、「生活の記録」を学校のネットワークにデータ保存し、学部職員がいつでも確認できるようにした。

以前までは、担任が生徒の学校での様子を見て、自立活動の個別の目標を設定していたが、「生活の記録」を一目見るだけで自立活動における落ち込み部分のわかりやすくなり、生徒の個別の目標にも反映できるようになった。

(5) 家庭・保護者との連携

寄宿舎で培った力は、実生活において活かされなければならない。本校では年2回、家庭、保護者との面談を重ね、生徒一人ひとりの成果や課題、支援の工夫などについて、情報を共有している。その際、「生活の記録」が資料として用いられてきた。これまでの様式では、前述した家庭での継続した支援について課題が挙がっていたが、見直した新様式に対して、「文字入力されているところが、ポイントで絞られているので先生方が伝えたいことを把握しやすい。」「段階が細かく分けられて、課題が明確なので家庭でも言葉かけしやすい。」など好意的な意見を頂くことができ、様式がよりよいツールとして改善されたことを実感できた。

4. 研究の成果

「生活の記録」に、自立活動の視点を取り入れることで、生徒の実態や課題について学部と共通認識ができ、勤務時間の制約がある中でも支援体制などの連携強化につながるツールとなると考察できた。また、評価基準を明確に示すことで、担当職員の主観的評価にならず、寄宿舎指導員および学部、家庭との連携や統一した支援ができ、生徒一人一人の生活力が向上したと考えられる。さらに、旧様式では全ての項目に対して文章入力していたため、軽度知的障害のある生徒にとって自分の課題が何なのか分かりにくかった。新様式の「生活の記録」では、5段階評価にしたため、生徒自身も自分の課題が見やすくなったと考えられる。

今後は生徒自身も自分の課題を認識しながら、課題克服に向けて意識の変容も見られるのではないかと期待できる。

5. 研究のまとめ

私達、寄宿舎指導員が毎日行っている「生活指導」は生徒達が目指す、社会的自立に関して最も重要な役割を担っている。その中で私達大人が、限られた時間の中で、より確実に情報共有し、支援方法の統一を行うことによって生徒の能力を伸ばせることができ、また伸ばす責任があると考ええる。

本研究を通して、情報共有方法（支援ツール）を整えることが、生徒の成長と変容に繋がると明確に示すことができた。今後の課題としては、「評価の低い生徒・保護者への配慮や説明方法」「成長が見られなかった生徒への対応」「評価基準の見直し」等があげられた。また8月末の三者面談で保護者の意見を集約し、参考材料としていきたい。

今後も課題解決に向けて職員間で連携していくと共に、知的障害のある生徒が卒業後、立派に社会の入口に立つことができるように、改善と実践を重ねていきたい。また、今回改善した新様式を最高の支援ツールとして沖縄県全体に発信していき、学校と家庭との継続した指導支援の一助となることを願う。

（主な参考文献等）

「特別支援学校高等部学習指導要領」（文部科学省）

「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編」（幼稚園部・小学部・中学部）（文部科学省）

「知的障害特別支援学校の自立活動の指導」（全国特別支援学校知的障害教育校長会）

「寄宿舎での生徒の自立支援の伝え方～生活の記録を通して～」(2016 沖縄高等特別支援学校寄宿舎研究録)

「生活の記録の活用～生徒・保護者との連携・支援ツールとして～」(2015 沖縄高等特別支援学校寄宿舎研究録)

「学校内外との連携」(2013 沖縄高等特別支援学校寄宿舎研究録)